

日・韓における伝承のあり方

「さよひめ」説話と「堤上」説話^{ジェサン}

DOWN THE GENERATIONS IN KOREA AND JAPAN

The Tales of *Sayohime* and *Jesang*

金 京 欄*

The traditional tale “Sayohime” is well known throughout Japan, in two differing versions. One includes the legend in which Sayohime climbs a mountain and waves a cloth, which is also found in the works: “Hizen-no-Kuni Fudoki”, “Kokon Chomonju”, and “Jukkinsho”, which post-date “Manyoshu”. The other, relating to a ritual sacrifice, can be found in books of fairy-tales (*otogizoshi*) and in *sekkyo joruri* such as “Matsura Choja”.

In the “Manyoshu” poems, Sayohime is described as a woman who sets out after her husband Sadehiko, who has departed for the war, and waves to him from the top of a mountain. However, in “Kokon Chomonju” and “Jukkinsho”, Sayohime is the God of the Matsura Shrine. Moreover, in “Nihon Meijo Monogatari” and the main text of “Soga Monogatari” she appears as a *bofuseki*. A *bofuseki* is a woman who, after parting from her

*KIM Gyeong-Ran 韓国啓明大学日文学科卒業、同大学大学院日文学科卒業、1987年来日、東京学芸大学大学院国語教育学科国文学専攻（修士論文：近松門左衛門の心中物における生死の観念）修了。早稲田大学大学院芸術学科演劇学（日本演劇）専攻（修士論文：近世浄瑠璃における景清像）修了。現在早稲田大学大学院芸術学科演劇学（日本演劇）専攻博士課程在学中。論文としては「景清像の展開－出世景清に至るまで」『日語日文学研究』29輯、「大仏殿万代石礎」考『日本学報』38輯がある。現在「日・韓における語り物の比較」を研究課題としている。

husband, pines for him so desperately that she is transformed into a statue.

There is a Korean tale which describes a phenomenon very similar to *bofuseki*. This is the tale of “Jesang” included in “Samkuk-Sagi” (1145) and “Samkuk-Yusa”. The wife of Jesang, who was crossed the sea to Japan, climbs a mountain and weeps so intensely that she is turned to stone.

Korean historical records show that Jesang sailed to Japan during the reign of King Nulji, the 19th ruler of the province of Shinra, to rescue the King’s younger brother who had been taken hostage by the Japanese. A corresponding account can be found in “Nihonshoki.”

The version of “Jesang” in “Samkuk-Sagi” is historically credible, but in the “Samkuk-Yusa” version, the colorful description of Jesang’s wife has been added. In “Samkuk-Yusa”, the woman climbs the mountain and looks toward *Wanokuni* (Japan). As she cries loudly, she dies, and is transformed into a Mother God. References to this tale also appear in “Dongkuk-Munhon-Bigo” and “Dongkuk-Yeoji-Sungram”.

Rather than merely sharing similar motifs, it would seem that the traditional tales of Korea and Japan are more directly connected.

1 さよひめ説話

日本のさよひめ説話は、佐賀県唐津市を中心に東北地方に至るまで広範囲に分布しているが、その内容は大体二つに分かれる。一つは、『万葉集』以後『肥前国風土記』、『古今著聞集』、『十訓抄』などに見られる、領布振り山伝説に関わるもので、もう一つは、御伽草子『さよひめ』諸本や説経浄瑠璃『まつら長じゃ』などにみられる、生け贄伝説に関わるものである。

ところで、領布振り山伝説と関わって伝承されるさよひめ説話は、韓国の堤上説話に登場する、堤上の妻をめぐって伝わる望夫石説話と非常に類似している。ここでは、これらの説話をとおして、両国における伝承のあり方を見てい

くことにする。さらに、二つの説話は単なるモチーフ上の類似に止まらず、何らかの直接的な接点も想定されるのであるが、それについても考えてみる。

さよひめの「ひれ振り山」伝説に関する記録が初見されるのは、『万葉集』である。巻5に次の歌が載せられている。

- 868、松浦縣佐用比賣の子が領布振りし山の名のみや聞きつつ居らむ
- 871、遠つ人松浦佐用比賣夫戀に領布振りしより負へる山の名
- 872、山の名と言ひ繼げとかも佐用比賣がこの山の上に領布を振りけむ
- 873、萬代に語り繼げとしこの嶽に領布振りけらし松浦佐用比賣
- 874、海原の沖行く船を帰れとか領布振らしけむ松浦佐用比賣
- 875、行く船を振り留みかね如何ばかり戀しくありけむ松浦佐用比賣
- 883、音に聞き目にはいまだ見ず佐用比賣が領布振りきとふ君松浦山^①

以上に詠まれている歌から、松浦さよひめが、出征した夫を慕って山に登り、領布を振ったという伝説が、『万葉集』成立以前から知られていたことが言える。また871番歌の序に、

大伴佐提比古^②の郎子、特り朝命を被り、使を藩国に奉る。艤棹して言に歸き、稍蒼波に赴く。妾松浦佐用比賣、此の別ることの易きことを嗟き、彼の會ふことの難きことを嘆く。即ち高山の嶺に登りて、遙かに離れ去く船を望み、悵然に肝を斷ち、黯然に魂を銷す。遂に領布を脱ぎて塵る。傍の者涕を流さずといふこと莫りき。これに因りて此の山を號けて領巾塵の嶺と曰ふ。

とあって、領布振り山の地名由来とともに、松浦さよひめの夫が大伴佐提比古であることがわかる。

『風土記』「肥前国・松浦郡」^③には、篠原の弟日姫の子のこととして、ほぼ

同じことが記されている。

「ひれ振の峯」のところをみると、弟日姫が夫の大伴の狭手彦が任那にわたった時、峰に登って領布を振った、それによって、ひれ振りの峰と名づけられたとある。そしてこの話に続いて、弟日姫のところへ毎晩ある男が通ってくるので、その男の裾に糸をつけ在所を尋ねたら、その男は実は池に住んでいる蛇であったという、蛇との関わりが記されている。これは、御伽草子「さよひめ」諸本に見られる、蛇への生け贄モチーフとつながるものである。さらに、同じく松浦郡に、「鏡の渡り」のところがあって、さよひめが狭手彦に送られた鏡を、川を渡る時落としたので、鏡の渡りと名付けられたとあるが、この話は、謡曲『松浦』の、鏡を抱いて投身するさよひめとつながる。

ところで、『十訓抄』にも、松浦さよひめのことが留められている。

我国の松浦佐夜姫といふは、大伴狭手丸が妻なり。夫、帝の御使に、唐へわたるに、すでに舟に乗りて行く時、その別れををしみて、高き山の峯にのぼりて、遥に離れゆくを見て、悲に堪へずして、領布をぬぎて招く。見る人涙を流しけり。これより、その山を領布塵峯といふ。この山は、肥前國にある、松浦明神とて、今におはしますは、この佐夜姫のなれるといひ傳へたり^④

ここでは大伴狭手丸の妻で、夫が唐へ渡る時、その別れを惜しんで、峰に登って悲しみに耐えず領布を振った、その峰が肥前国にある、そしてこの国においてさよひめが、松浦明神として祀られているとある。『古今著聞集』^⑤にもほぼ同文の記事がある。

そして寛文十年刊の『日本名女物語』には、

さよひめわかれをなけき、あとをしたひて山のみねにのほり、舟のみゆる程は、帔をあけてまねきつつ、はるかに舟もとをさかりゆきしてみえずな

りければ、さよひめかなしみなきて、つるに立ちなからいきたへて、むなしくなれり、其山をひれふる山となつく。わかれをしたふ心さしのやるかたなく死けり。人みなあはれみてはかを作りて、命は露もおちぬへきかなといはる。あるひとはいはく、さよひめはまつらのひれふる山にして、立ちなから石となり、今の世にもなをその石のこりたりといふ^⑥

とある。さよひめが夫を慕って、立ちながら石になったという、望夫石モチーフが加わるのである。貞享年刊の流布本『曾我物語』にも、

箱王は左衛門が船のうちのみに見送りて、泣くより外の事ぞなき。かの松浦佐世姫が雲井の船を見送りて、石となりけん昔を思ひやられて、空しく坊に帰りけり^⑦

とあって、この物語の成立時代に、すでに、さよひめが石になったという伝承が定着していたことがわかる。ところが、真名本『曾我物語』にはそれに当たる記事がみえないことから、佐藤りつ氏は、さよひめの石化は寛文頃以前であろうと推定している^⑧

『松浦古事記』には、田嶋宮の末社として「佐用姫神社之事」を記している中で、

此島の小高き所へつたひ登り、遙かに唐土の雲路ともおぼしき方を、一面に見渡しけるに船影も見えざれば、其所に伏し轉び歎き悲しみ其姿終に石と化しぬ、之則ち佐用姫の靈望夫石なり^⑨

とある。

『万葉集』に夫を慕って山に登り、領布を振ったと詠まれるさよひめは、『古今著聞集』や『十訓抄』において「松浦明神」とされており、『日本名女物

語』や流布本『曾我物語』、『松浦古事記』においては望夫石化されているのである。

2 堤上説話

日本のさよひめ説話と類似する説話として、韓国に「堤上」説話がある。「堤上」とは、もともと官職名であるが、堤上の官職についていたある新羅の忠臣に纏わる説話が広まり、「堤上」というとその人物を連想するようになった。

民間に広まっている堤上説話の概要は次の通りである。

新羅19代訥祗王在位の時、一人の堤上がいたが、知謀に富んでいたので王様からの親愛も厚かった。ある日、王様から他国にいる二人の弟を国へ連れ戻すよう命じられる。王様の弟のト好は高句麗へ、もう一人の弟未欺達は倭国へ人質とされていた。堤上はまず高句麗へ行って知略でト好を帰し、倭国へも渡ってひそかに未欺達を帰らせた。このことが倭王に知られる。倭王はもし倭国の臣下になれば許すと諭すが、堤上は鷄林（新羅）の狗豕になろうとも倭国の臣下にはならないと聞き入れない。ついには節を守って死んだ。

一方、堤上が王様から倭国へ渡るように命じられた時、自分の任務を考えた上、決心し、妻子には別れも告げず倭国へ出向いたのであったが、堤上の妻は夫の後を追いかけて、三人の娘を連れて港まで辿り着いた。しかし、夫を乗せた船はすでに遠い海の中を乗り出していた。せめて夫の乗っている帆影でも見送ろうと、山頂まで登り両手を挙げて声を限りに夫を呼んだが、その声が聞こえるはずもなく、船は地平線の彼方へと消えてしまった。船の帆影が見えなくなると、妻は悲しさのあまり、そのまま倒れてとうとう死んだ。その屍はいつか大きな岩になってしまった。人々はそれを望夫石とよぶようになった^⑩、という内容である。

堤上に関する記録が初見されるのは『三国史記』であるが、『三国史記』は1145年金富軾によって編纂され、高句麗、百濟、新羅の三国の歴史が列伝形式

に記録されている、韓国の現存する史書の中で最古のものである。

『三国史記』卷45、列伝5には次のように記述している。

朴堤上或云毛末。始祖赫居世之後。婆婆尼師今五世孫。祖阿道葛文王。父勿品波珍淦。堤上仕為敵良州干。先是實聖王元年壬寅。與倭國講和。倭王請以奈勿王之子未歎欣為質。王嘗恨奈勿王使已質於高句麗。思有以釋憾於其子。故不拒而遣之。又十一年壬子。高句麗亦欲得未歎欣之兄卜好為質。大王又遣之。及訥祗王即位。思得辯士往迎之。聞水酒村干伐寶鞋、一利村干仇里酒、利伊村干波老三人有賢智。召問曰。吾弟二人質於倭麗二國。多年不還。若之何而可。三人同對曰。臣等聞敵良州干堤上剛勇以有謀。可得解殿下之憂。於是徵堤上使前。告三臣之言而請行。堤上對曰。臣雖愚不肖。敢不唯命祇承。遂以聘禮入高句麗。語王曰。臣聞交鄰國之道誠信而已。若交質子。則不及五霸。誠末世之事也。今寡君之愛弟在此。殆將十年。寡君以鵠鶩在原之意。永懷不已。若大王惠然歸之。則若九牛之落一毛。無所損也。而寡君之德大王也、不可量也。王其念之。

王曰諾。許興同歸。及歸國。大王喜慰曰。我念二弟如左右臂。今只得一臂奈何。堤上報曰。臣雖奴才既以身許國。終不辱命。然高句麗大國。王亦賢君。是故臣得以一言悟之。若倭人不可以口舌論。當以詐謀可使王子歸來。臣適彼。則請以背國論。使彼聞之。乃以死自誓。不見妻子。抵栗浦汎舟向倭。其妻聞之。奔至浦口。望舟大哭曰。好歸來。堤上回顧曰。我將命入敵國。爾莫作再見期。遂徑入倭國。若叛來者。倭王疑之。百濟人前入倭。謔言新羅與高句麗謀侵王國。倭遂遣兵邏戎新羅境外。會高句麗來侵。并擒殺倭邏人。倭王乃以百濟人言為實。又聞新羅王囚未歎欣堤上之家人。謂堤上實叛者。於是出師將襲新羅。兼差堤上與未歎欣為將。兼使之鄉導。行至海中山島。倭諸將密議。滅新羅後。執堤上未歎欣妻孥以還。堤上知之。與未歎欣乘舟遊。若捉魚鴨者。倭人見之。以謂無心喜焉。於是堤上勸未歎欣潛歸本國。未歎欣曰。僕奉將軍如父。豈可獨歸。堤上曰。若二人俱發。則恐

謀不成。未欺欣抱堤上項。泣辭而歸。堤上獨眠室內晏起。欲使未欺欣遠行。諸人問將軍何起之晚。答曰。前日行舟勞因。不得夙興。及出知未欺欣之逃。遂縛堤上。行舡追之。適煙霧晦冥。望不及焉。歸堤上於王所。則流於木島。未幾。使人以薪火燒憫支體。然後斬之。大王聞之哀慟。追贈大阿淦。厚贈其家。使未欺欣娶其堤上之第二女為妻、以報之。初未欺欣之來也。命六部遠迎之。及見握手相泣。會兄弟置酒極娛。王自作歌舞。以宜其意。今鄉樂憂息曲是也^①

『三国史記』の成立から約1世紀後、僧の一然（1200-1289）によって、『三国史記』に洩れた民談や説話などを加えて編纂された『三国遺事』は、卷1、紀異第1に次のような記述になっている。

（省略）堤上簾前受命。徑趨北海之路。變服入句麗。進於寶海所。共謀逸期。先以五月十五日。歸泊於高城水口而待。期日將至。寶海稱病。數日不朝。乃夜中逃出。行到高城海濱。王知之。使數十人追之。至高城而及之。然寶海在句麗。常施恩於左右。故其軍士憫傷之。皆拔煎鏃而射之。遂免而歸。

王既見寶海。益思美海。一欣一悲。垂淚而謂左右曰。如一身有一臂一面一眼。雖得一而亡一。何敢不痛乎。時堤上聞此言。再拜辭朝而騎馬。不入家而行。直至於栗浦之濱。其妻聞之。走馬追至栗浦。見其夫已在舡上矣。妻呼之切懇。堤上但搖手而不駐。行至倭国。

詐言曰。鷄林王以不罪殺我父兄。故逃來至此矣。倭王信之。賜室家而安之。時堤上常陪美海遊海濱。逐捕魚島。以其所獲。每獻於倭王。王甚喜之而無疑焉。適曉霧濛晦。堤上曰。可行矣。美海曰。然則偕行。堤上曰。臣若行。恐倭人覺而追之。願臣留而止其追也。美海曰。今我與汝如父兄焉。何得棄汝而獨歸。堤上曰。臣能救公之命。而慰大王之情則足矣。何願生乎。取酒獻美海。時鷄林人康仇麗在倭国。以其人從而送之。堤上入美海房。至於明

且。左右欲入見之。堤上出止之曰。昨日馳走於捕獺。病甚未起。及乎日昃。左右恠之而更問焉。對曰美海行已久矣。左右奔告於王。王使騎兵逐之。不及。

於是囚堤上問曰。汝何竊遣汝国王子耶。對曰。臣是鷄林之臣。非倭国之臣。今欲成吾君之志耳。何敢言於君乎。倭王怒曰。今汝已為我臣。而言葉鷄林之臣。則必具五刑。若言倭国之臣者。必賞重祿。對曰。寧為鷄林之犬豚・不為倭国之臣子。寧受鷄林之箠楚。不受倭国之爵祿。王怒。命屠剥堤上脚下之皮。刈蒹葭使趨其上。(今蒹葭上有血痕。俗云堤上之血)更問曰汝何国臣乎。曰鷄林之臣也。又使立於熱鐵上。問何国之臣乎。曰鷄林之臣也。倭王知不可屈。燒殺於木島中。

美海渡海而來。使康仇麗先告於國中。王驚喜。命百官迎於屈歇驛。王與親弟寶海迎於南郊。入闕設宴。大赦国内。冊其妻為国大夫人。以其女子為美海公夫人。議者曰。其漢臣周荷在榮陽。為楚兵所虜。項羽謂周荷曰。汝為我臣。封為萬祿侯。周荷罵而屈。為楚王所殺。堤上之忠烈・無恠於周荷矣。初堤上之發去也。夫人聞之追不及。及至望德寺門南沙上。放臥長號。因名其地曰長沙。親戚二人・扶腋將還。夫人舒脚坐不起。名其地曰伐智旨。久後夫人不勝其慕。率三娘子上鷄述嶺。望倭国痛哭以終。仍為鷄述神母。今祠堂存焉¹²⁾

兩書の記録を比べてみると、『三国史記』では朴堤上、『三国遺事』では金堤上、王の弟らの名前が『三国史記』では未欺欣・卜好、『三国遺事』には美海・寶海になっているなど、叙述に多少相違があるが、記録の前半においてはほぼ同じ筋になっている。しかし後半になると、『三国史記』の方は、堤上の日本での死を悔やんで王が作った憂息曲が伝わることを記すことで締め括っているが、『三国遺事』では、堤上の妻が「鷄述神母」として祀られるようになったという伝承を中心に述べている。

ところで、この両書の記録にあたるような記事が『日本書紀』（神功皇后撰

政5年)にある。

五年の春三月、癸卯の朔にして己酉の日、新羅の王、迂禮欺伐・毛麻利叱智・富羅母智等をして朝貢らしめき。仍りて先の質微叱許智伐早を返さむとする情あり。この以に許智伐早に誂へて給きて、使者迂禮欺伐・毛麻利叱智等・臣に告げて、わが王、臣が久しく還へらざるに坐りて、悉に妻子を没めて孥とせりと曰へり。冀はくは暫本つ土に還りて、虚と實とを知りて請さむと曰さしめき。皇太后聽し給ひ、因りて葛城襲津彦を副へて遣し給ひき。共に對島に到りて、さかの水門に宿りき。時に新羅の使者微叱許智伐等、竊かに船と水手とを分ち、微叱早岐を載せて、新羅に逃れしめ、すなはち藁靈を造り、微叱許智の床に置きて、詳りて病める者の為して、襲津彦に告げて微叱許智、忽に病みて死なむと曰ひしかば、襲津彦、人をして病める者を看しめしに、すなはち欺かえたることを知りて、新羅の使者三人を捉へて、檻の中に納れて、火以ちて焚きて殺しき。すなはち新羅に詣り、踏鞴の津に次り、草羅の城を抜きて還りき。この時の俘人等は、今の桑原・佐糜、高宮、忍海、なべて四つの邑の漢人等が始祖なり^⑬

『三国史記』に、朴堤上を「毛末^{モマル}」とも言ったとあるが、『日本書紀』における、新羅の王の使いとして日本に渡ったと記録されている「毛麻利叱智^{モマリ}」はまさに、朴堤上の異名を表していると見て差支えないと思う。そして「微叱許智伐早」の「微叱許^{ミシコ}」は『三国史記』の、王の弟の「未欺欣」と類音である^⑭ことから、『三国史記』の朴堤上に関する記録と、『日本書紀』の記録との関わりが推察される。

以上、両書における堤上についての記録をみたが、ここには、堤上の妻が石になったという記録はない。『三国史記』における堤上の妻に関する記録は「不見妻子。抵栗浦汎舟向倭。其妻聞之。奔至浦口。望舟大哭曰。好歸來。堤上回顧曰。我将命入敵國。爾莫作再見期」に限るが、『三国遺事』には、「初堤

上之發去也。夫人聞之追不及。及至望德寺門南沙上。放臥長號。因名其地曰長沙。親戚二人・扶腋將還。夫人舒脚坐不起。名其地曰伐智旨。久後夫人不勝其慕。率三娘子上鵝述嶺。望倭国痛哭以終。仍為鵝述神母。今祠堂存焉」とあって、堤上の妻に関わる地名説話とともに、堤上の妻が「鵝述神母」として民俗信仰の対象になったことに敷衍されている。そして『東国輿地勝覽』にも、

在鵝述嶺上。神母。即朴堤上妻也。堤上死於倭国。其妻不勝其慕。登鵝述嶺、望日本。痛哭而終。遂為鵝述嶺神母。其村人至今祀之^⑤

とあって、堤上の妻が鵝述神母としてまつられていたことを記している。これは、日本における『十訓抄』や『古今著聞集』に見える、さよひめの「松浦明神」化と同じ伝承のあり方をみせていることがわかる。

ところで、『東都樂府』に載せられている占畢斎の「鵝述嶺曲」は、

鵝述嶺頭望日本 粘天鯨海無涯岸
良人去時但揺手 生歎死歎音耗斷
長別離、死生寧有相見時
呼天便化武昌石 烈氣千載千空碧^⑥

とあって、堤上の妻が望夫石になったという説話の存在を窺わせている。これもまた、日本のさよひめ説話の望夫石化と同じ伝承のありかたを見せているのである。

3 さよひめ説話と堤上説話の接点

これまで、日本のさよひめ説話と韓国の堤上説話をとおして、両者がモチーフ上非常に類似しているし、伝承のあり方においても、ほぼ同じ過程をみせていることをみてきた。さらに、両国の説話が、両国との関わりの中で語られて

いるし、領布振り山伝説系列のさよひめ説話が特に朝鮮と近接している九州地方に集中していること、堤上説話の背景になる地名が日本海に接する所であることなどから、両者における何らかの接点が想定されてよいと思う。

『三国史記』や『三国遺事』の記録によると、堤上は新羅の訥祇王（417-457）在位の時、日本に渡ったことになり、5世紀に活躍した人物となる。堤上のこととしてみられる日本側の記録は『日本書記』神功皇后摂政5年3月條に収められているが、「岩波古典文学大系」注には

この話は三国史記四十五、列伝第五の朴堤上、三国遺事紀異第一の金堤上の伝に見える四世紀末五世紀初めのできごとと同工異曲である。従って神功皇后の話とは別の起源の話であり^⑰

とある。

日・韓の古代歴史学者の間では、堤上説話がかかなり知られており、ここに記している通りに、『日本書記』の神功皇后摂政5年3月條の記録が『三国史記』や『三国遺事』の記事に相応していることもほぼ認められているらしい。

『日本書記』の神功皇后摂政5年の記録が、まさに堤上に関する記録に相当するとしたら、一步進めて、堤上とともに、堤上の妻に纏わる伝承も日本人の間に言い伝えられた可能性はあり得る。それが、朝鮮に出征する夫を見送るさよひめ伝承に膨らみを与えたかも知れない。しかし伝承の過程においては、はたして影響関係にあったのか、あったとしたら、どういう影響関係にあったか断定するのはむずかしい。日本のさよひめの伝承が韓国の堤上説話に何らかの形で入り込んだ可能性も全くないわけではない。というのは、さよひめのことが朝鮮の僧の耳に実際はいった記録があるからである。

前掲の『松浦古事記』には、さよひめの望夫石化のことを記した上に、

それより十ヶ年の星霜を経て狭手彦歸朝の時、同船して唐土の沙門曇

惠・道探來朝しけれども、物部大連等、日本に佛法を弘めけるにより、神明のたたり在りと奏して、佛像捨て諸寺を焼失ふによつて、蘇我稻目の指圖として兩沙門は此松浦より歸唐せり。此時沙門川上の里に觀世音を彫刻し佐用姫の菩提を弔ひ、又此嶋にも來りて追善をなし、塔婆を立て戻りぬ^⑱

と伝えているのである。この記録に従うなら、朝鮮から仏法をひろめる為日本に渡った沙門曇惠・道探は、まさにさよひめの夫である大伴狭手彦が歸る時同船した者である。また兩沙門が佐用姫の菩提を弔ったとあることから、佐用姫が夫の帰る時点で、既に亡くなっているし、ある程度、さよひめの死に纏わる話が人々の間に口伝されていたことが窺える。韓国の記録上、曇惠・道探は百濟27代威徳王（554-597）在位の間活躍した僧で、554年日本に渡ったと伝える。『本朝高僧伝』には、この二人が「本朝有沙門之始也」^⑲と記している。

ところで、佐藤りつ氏は、さよひめ説話が望夫石化した原因についての諸氏の意見を次のようにまとめている^⑳。

- ①『十訓抄』または『古今著聞集』に並べあげられている「望夫石の故事」と「松浦さよひめの事」が相似た話しであるので、混じたため
 - ②『風土記』の「因以為名」を「因以為石」と誤読したため
 - ③古伝承は悲嘆のあまり「石に化すばかりなり」と言い伝えたものを、その後「石になれり」としたため。
- ①の立場をとるのが『ねざめのすさび』である。著者の石川雅望は「松浦さよひめ石となれるといふこと」において、

考るに、古今著聞集、また十訓抄に幽明録をひきて、望夫石の故事をあげ、つぎにさよ姫がことをしるしたり。これにも石となれりとはあらねど、はじめの望夫石の故事と事もよくかよひてあれば、佐夜姫の故事と望夫石のことと混じて、ひがおぼえの人の物語せしが、世にひろごりたるなるべし^㉑

と記している。

②の立場にあるのが『傍廂』である。著者の齋藤音麻呂は次のように記している。

按ずるに、かの風土記に、「挙帔招因以為名」とあるは、帔を挙げて振りし故に、其山帔振峯と號けしよしなり。「為名」といふ二字を「為石」と見誤りて、慕夫石の故をつくりしなるべし^②

③の立場をとるのが藤沢衛彦氏で、氏は

肥前国唐津の松浦河口、虹の松原の南に今にその故事によって名けた領布振山の佐与姫社があつて、ここには、佐与姫が悲嘆のあまり石になったと伝説される望夫石というものが、殿内に安置されてありますが、古伝承は石に化すばかりなりと言ひ伝えたのを、その後附会して石になれりとし、遂に望夫石というその石まで作りあげられているのは、できすぎであります^③

と記している。

いずれも伝承の世界においては起こり得ることではあるが、さよひめ説話の望夫石化をひがおぼえや誤読によるものと説明するところは、今ひとつ納得のいかないものがある。

そこで、筆者はこれまでみてきたことをふまえた上で、さよひめの望夫石化を、日・韓両国の関係において想定したい。具体的にどのような影響関係にあったかは断言しがたいものの、さよひめ説話を堤上説話との関係において考える必要があると思う。

これまで、領布振り山伝説系列のさよひめ説話を中心に堤上説話との伝承過

程を見、両説話の接点をも考えてみたが、もう一つの、生け贄系列のさよひめ説話が存在することを前に述べた。この系列のさよひめに類似する話として韓国に『沈清伝』がある。韓国においては、しばしば『沈清伝』の根源説話の一つとして日本のさよひめ説話を取り上げられることがある。この件に関して柳田国男氏の説を応用して解釈するならば、堺・国堺と関係をもってさへの神から転じたさよひめ説話が、もっと大きな国と国との堺という設定のもとで、主人公の悲哀を語った生け贄説話も両国を隔てた国の堺という設定において、女性の悲話として定着したということが考えられる。これらの問題も今後の研究課題に含めていきたい。

注

- ①日本古典文学大系5『萬葉集』二 卷五 岩波書店 p.91-95
- ②注①に同じ。注に「宣化紀の犬伴狭手彦に同じ」とある。 p.90
- ③日本古典文学大系2『風土記』「肥前国風土記・松浦郡」 岩波書店 p.395-397
- ④『十訓抄』国民文庫43 p.218-219
- ⑤日本古典文学大系81『古今著聞集』卷五 岩波書店 p.166-167
- ⑥卷三-四「狭夜ひめの事」
- ⑦有朋堂文庫『曾我物語』卷四 p.491
- ⑧佐藤りつ「さよひめ伝説考」『和歌文学研究』20号 S41・9 p.37
- ⑨『松浦叢書』上巻-五に所収、吉村藏三郎 S9 p.81
- ⑩『韓国口碑文学大系』8-12慶尚南道蔚山市説話参照、韓国精神文化院高麗苑 1981
- ⑪完訳『三国史記』下 卷45 金富軾著、金思燁訳 S56 p.781-782
- ⑫完訳『三国遺事』 卷1 一然著、金思燁訳 S51 p.94-95
- ⑬日本古典全書53『日本書紀』二 p.228
- ⑭微叱許ミソコの「許」の韓国式発音は「フ」であり、未欺欣ミソコの韓国式発音は「ミサフン」である。
- ⑮『新增東国輿地勝覧』二 卷21 慶州府「神母祠」朝鮮史学会 S5 p.20
- ⑯蘇在英「堤上説話論考」所引、国文学研究叢書8『民俗文学研究』1981 p.280
- ⑰日本古典文学大系67『日本書記』上 岩波書店 p.349
- ⑱注⑨に同じ p.82
- ⑲『大日本仏教全書』102「本朝高僧伝」第一 名著普及会 S59 p.61
- ⑳注⑧に同じ p.37-39
- ㉑『日本随筆大成』第三期一卷 p.163-164
- ㉒注㉑に同じ p.37
- ㉓藤沢衛彦『日本民族伝説全集』8巻 河出書房 S31 p.266-267

討議要旨

武井協三氏より、日本側の資料として重要な『松浦古事記』の資料としての性格について質問があり、発表者からは、文化年間の成立で松浦関係のものを集めた地方史的な性格を持っており、「松浦叢書」の一つであるとの説明がなされた。

また、山口博氏より、韓国、日本双方の説話が望夫石の話を取り込んで変貌していった際の両国の関係を考慮する必要性が指摘され、その参考として氏は、『万葉集』巻五ができあがるにあたって大伴旅人がなんらかのかたちで関わっているとされていること、その大伴の家に新羅の人間が同居し、そこで亡くなった可能性があるということが、両伝説をつなぐうえで重要な意味をもってくるのではないかと、との意見を提出された。